

基調講演

LD 等のある児童生徒の活躍を広げるテクノロジーとアート

東京大学先端科学技術研究センター 教授

近藤 武夫 氏

【ご略歴】

東京大学先端科学技術研究センター教授。博士（心理学）。インクルーシブな教育と雇用が専門領域。広島大学教育学研究科助教、米国ワシントン大学 DO-IT Center 客員研究員を経て現職。多様な障害のある人々を対象に、教育や雇用場面での支援に役立つテクノロジー活用や合理的配慮、修学・雇用制度の設計と地域実装に関する研究を行っている。

【報告内容】

LD 等のある児童生徒にとってのテクノロジー活用（読み・書き・計算・聴こえや注意・実行機能等を支援する機器活用）は、紙のノートや鉛筆、教科書や書籍・資料と同じように彼らが学びの出発点に立つために不可欠なものです。

テクノロジー活用は、合理的配慮や基礎的環境整備（事前的改善措置）の具体的な実現方法でもあり、学校という環境にはそれらの活用がごく自然に存在していることが期待されています。しかしながら実際には「他の生徒と異なる取り扱いを、例えば定期考査や宿題、入試で認めて良いのか？」等々、単なる技術的な問題以外に、教師一人一人の歩みを阻んでしまう障壁（ルールや慣行、文化や人々の態度の障壁）が残されています。

そもそもテクノロジー活用は、LD 等のある児童生徒が、他の生徒と同じ学びの環境に参加するスタートラインを整えるものに過ぎません。その向こう側には、個々の児童生徒が実現したい夢や希望、到達したいゴールという高い頂がそびえています。テクノロジー活用や合理的配慮を認めるか否かという問題の解決のみを学校のゴールに据えることは、すでに現代の学校にとっては低い目標設定と言える時代になりました。アートや表現で社会活躍や自己実現を目指す当事者の若者の例を通じて、学校や地域がその先にある社会活躍に目標を据えることの大切さと、その目標の達成を支える環境整備について学びましょう。